

奈文研

ニュース

No.72

Mar.2019

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立自然史博物館
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良県生駒郡三郷町中央1-1
http://www.nabunken.go.jp

調査研究の舞台裏を展示する

奈良文化財研究所には、「環境考古学研究室」という研究室があります。「環境」も「考古学」も一般的な用語ですが、「環境考古学」は耳慣れない言葉かもしれません。この研究室では、遺跡から出土した動物の骨や貝等の調査研究をしています。

遺跡から出土する骨は、当時の生き物の様子を語るだけではなく、骨に残された傷跡等からは、昔の人が動物をさばっていた道具や調理法等、生き生きとした人々の営みを読みとれます。環境考古学研究室では、このような骨から歴史をあきらかにするための調査研究をおこなっているのです。

奈文研の調査研究の現場は、普段はほとんど公開されていないため、どのような過程を経て、研究成果が導かれているのか見えにくいのが現状です。しかし、この調査研究の過程にこそ、研究のおもしろさや奥深さが隠れているのです。

そこで飛鳥資料館では、4月から、環境考古学研究室の調査研究の舞台裏にスポットを当てた「骨ものがたりー環境考古学研究室のお仕事」という展覧会を開催します。本展覧会では、研究室でおこなっている基本的な調査過程を6つのステップに分けて、その仕事の内容や技術等を紹介します。実

際に研究で取り扱ってきた出土資料や骨格標本を見ながら、研究員がどのように資料と向き合い、歴史を解明していったのか、その視点や手法がわかる展示です。

今回の展示で特にこだわっているのが、展示会場内のデザインです。会場には研究室の机や骨格標本の保管庫を再現して、研究室の空間を体感していただけるようになっています。大量の標本が並ぶ研究室は、「考古学」のイメージからは少し意外に感じられるかもしれませんが、この標本も、全国の研究員が利用する貴重な資料なのです。また、5月10日・17日の「研究員を展示！」では、展示室で研究員が実際に調査研究します。研究の様子がわかる絶好の機会です。

さらに、本展覧会のために撮影した、調査・研究現場の写真も見どころの一つです。研究員の視点を意識しながら、研究室の日常が伝わるような写真を多数用意しました。これらの写真からも、環境考古学の研究のおもしろさや魅力を感じていただきたいと思います。会期中には、本物の骨や骨格標本を使ったイベント「体験！研究員のお仕事」も開催します。ぜひ、この機会に飛鳥資料館へお越しください。（展覧会の会期等は本号8頁をご覧ください。）
(飛鳥資料館 小沼 美結・西田 紀子)



研究室の骨格標本の保管庫



出土したマグルの骨と標本の比較作業

発掘調査の概要

藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第197-4次）

藤原宮には、宮大垣を取り囲む外濠と、宮周辺の条坊道路との間に幅60mもの広大な空閑地があったことがわかっています。この空閑地は、藤原宮だけにみられる特徴的なもので、「外周帯」と呼んでいます。本調査区は、外周帯のなかでも、南面大垣中門と六条大路の間に位置するところにあります。これまでの調査成果から、調査区内は朱雀大路、および先行朱雀大路の想定位置にあたるのが判明しており、発掘調査でもこれらに関する遺構が検出されることが予想されました。

調査は水路改修にともなうもので、水路に沿って南北幅約1.5m、東西約100mの調査区を設け発掘をおこないました。調査期間は2018年11月19日から12月14日まで、調査面積は216㎡です。

調査区内では、①近・現代の水路関連層、②古代の可能性のある整地土、③古墳時代以前の河川性砂礫層、④沼状堆積層の順に土層が確認できました。水路による削平が著しく、遺構の残存状況はよくありませんでしたが、南北溝4条、斜行溝1条、井戸1基を検出することができました。



調査区全景（西から）

朱雀大路西側溝、および先行朱雀大路西側溝の想定位置では、それぞれ南北溝を検出しました。前者は、幅4.2m、深さ0.4m、後者は、幅1.0m、深さ0.2mを測ります。いずれも、上面は削平されており底面付近がかろうじて残っている状況だと考えられます。ただし現状では、いずれの溝にも古代の遺物は含まれず、溝の直下には古墳時代以前の河川性砂礫層もあるため、朱雀大路西側溝・先行朱雀大路西側溝と断定するにはいたりませんでした。今後の周辺の調査成果を待ちたいと思います。なお、朱雀大路東側溝については確認できませんでした。想定位置には、調査区南側に位置するコモ池から水を引き込むための旧水路があったため、東側溝は壊されてしまったとみられます。

また、調査区東端で井戸を1基検出しました。井戸は、古墳時代の斜行溝を掘り込んでおり、掘方は直径3.3m、深さ1.3m以上あります。横板組の井戸枠が少なくとも2段残存しており、その井戸枠の内法寸法は83cmありました。井戸からは、藤原宮造営期の土器が出土しましたが、掘方や埋土には藤原宮の瓦を含んでいませんでした。このことから、この井戸は、藤原宮造営期に短期間使用されたものとみられます。

このように、今回の調査は狭い調査区でしたが、藤原宮造営期における藤原宮外周帯の土地利用の一端を確認することができました。また、古墳時代以前の河川性砂礫層や沼状堆積層の広がりには、藤原宮造営前の調査区一帯の旧地形を考える上で大きな参考になります。藤原宮造営に際しては、このような軟弱な地盤を大規模に造成し、利用可能な土地に改良していったことがあきらかになりました。

（都城発掘調査部 石田 由紀子）



井戸検出状況（南から）

平城宮東区朝堂院の調査（平城第602次）

奈良時代後半の平城宮には、儀式や饗宴の場である中央区と、朝政の場である東区の2つの朝堂院があったと考えられています。東区朝堂院は第二次大極殿院の南側に展開した南北約284m、東西約177mの区画内に、12棟の朝堂が東西対称に並び、南には南門を構えていました。

東区朝堂院地区では、1980～90年代にかけて、地区東半を中心に発掘調査をおこない、奈良時代前半から後半にかけての朝堂、南門の規模やその変遷、区画を仕切る掘立柱塀から築地塀への変遷等がはっきりになりました。

東区朝堂院の東門は、1989年に部分的な調査をおこない（第203次）、基壇の南北規模がはっきりになりました。今回の調査では、基壇の東西規模に加えて、東門の南北に取り付くと想定される築地塀の遺構、さらには奈良時代前半の東門周辺の様相を明らかにすることを目的として、調査区を設定しました。調査面積は東西約14m、南北40mの約560㎡で、2018年10月1日に開始し、2019年1月21日に調査を終了しました。

今回の調査では、奈良時代後半の東門基壇、築地塀、雨落溝等を検出し、大きく2つの成果をあげることができました。

ひとつめは、奈良時代後半の東門基壇の東西幅がはっきりになったことです。基壇東端は水路によって壊されていたことが、築地塀や雨落溝の遺構を検出したことから、東区朝堂院東側の区画の位置が確定しました。東門基壇も現存する部分から、この区画の位置までの距離を反転させることで、当初の東西幅が約10mと推定できました。つまり奈良時代後半の

東門の基壇規模は、南北約20m（66尺）、東西約10m（33尺）であったとみられ、この基壇規模は東院地区の東院南門（建部門）の基壇とほぼ同規模であることもわかりました。

東門の上部構造は礎石建ちで、基壇規模から桁行5間、梁行2間と想定されます。基壇上面は後世に大きく削平され、礎石や根石の掘付掘方等は残っていませんでしたが、周囲の雨落溝から多量の瓦が出土したことから、瓦葺であったとみられます。築地塀も同様に、雨落溝から多量の瓦が出土し、瓦葺であったことが推定されます。

ふたつめは、東区朝堂院の東西幅が600尺で計画施工されていたことが確実に became ことでした。これまでの調査から東西幅は約177mと想定していましたが、先述のとおり、今回の調査で、東区朝堂院東側の区画の位置が確定したことにより、東区朝堂院の東西幅が約177m、当時の尺度の600尺（500大尺）で計画施工されていたことが確実になりました。

奈良時代前半の遺構は、現在整理中ですが、今回の調査成果からは、東区朝堂院の造営計画や、東隣の東方官衙地区や東院地区との関わり、さらには、藤原宮や長岡宮等、各宮城における朝堂院の変遷の実態を解明することにもつながると思います。

昨年12月15日には現地見学会を開催しました。晴天ではありましたが、とても寒い中569名の方にお越しいただきました。東区朝堂院の調査は、今回で最後となりますが、東門が開いた先にある東方官衙地区や東院地区の調査はこれからも継続しますので、今後の調査にもどうぞご期待ください。

（都城発掘調査部 福嶋 啓人）



調査区全景（奈良時代後半の遺構面、南東から）



現地見学会の様子





小さな貝の破片を調べる

ピンセットで並べているのは、ムラサキインコ (*Septifer virgatus*) という沿岸の岩場に密集して付着する貝類です。カラスガイやマルコとも呼ばれます。

宮城県気仙沼市にある台の下貝塚(縄文時代)の発掘調査では、土壌を1mmの目のフルイにかけたところ、非常に小さなムラサキインコの幼貝の破片がたくさん見つかりました。これにより、縄文時代の人々が、岩に張り付いた大きな貝を素手で探っていただけでなく、ヘラなどを使って密集した貝をブロックごと剥ぎ取ったと考えられます。

このように、小さな破片まで丁寧に分析することによって、「何を食べていたのか」だけでなく、「どのように採集したのか」も検討できるのです。

環境考古学研究室では、東日本大震災の復旧・復興事業にともなう発掘調査への支援を継続的におこなっています。最終的には、岩手県や宮城県の7遺跡から出土した約15万点の出土資料を分析・報告する予定です。また、飛鳥資料館の春期特別展「骨ものがたり-環境考古学研究室のお仕事」では、こうした復興支援を含めて、環境考古学研究室の仕事を紹介します。ぜひご来館ください。

(埋蔵文化財センター 山崎 健/飛鳥資料館 小沼 美結)

◎ 奈文研との学術交流に参加して

中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所は1991年より長期にわたって共同研究を実施してきました。中日両国の文化交流史に関する学術研究を促進し、中日の友好関係をより確かなものにするために、2017年に改めて「友好共同研究議定書」を締結しました。両研究所の人員が相互に訪問し、関連する遺跡や遺物の調査研究に参加し、適切な研究課題を選択し、共同研究を継続的に進めることを目指します。こうした枠組みのなかで、2018年11月15日から12月14日まで日本を訪問し、学術交流をおこないました。

日本滞在中に実施した主な仕事は以下の3点です。

- ①東大寺東塔院および平城宮東区朝堂院の発掘調査、
- ②飛鳥時代から平安時代の都城遺跡と寺院遺跡、中日文化交流に関連する遺跡や遺物の調査、
- ③中国都城遺跡に関する最新の発掘調査と研究成果の報告。

短期間ではありましたが、日本の発掘調査や資料整理の方法を学ぶことができ、自国での発掘調査や研究について改めて考えるきっかけとなりました。関連する遺跡の見学や博物館での資料調査では、考古学や歴史学の情報収集に注力するだけではなく、遺跡保護や展示活用視点から日本の博物館における展示設計、遺跡公園の建設や管理運営についても注目しました。今回の学術交流を通じて、日本の都城考古学についての認識を深めることができ、今後、都城考古学研究を進めていく上で大いに参考となりました。

最後に、今回の滞在中、多くの日本人研究者と知り合い人脈を広めることができました。今後も学術交流を通じて、両研究所の共同研究や友好関係が促進発展するよう微力ながら協力していきたいと思っております。

(中国社会科学院考古研究所 沈麗華、
翻訳 今井見樹)



平城宮東区朝堂院の発掘調査現場にて(前列右から3人目)

◎ 薬師寺文書の調査

歴史研究室は、薬師寺の古文書調査を、1980年以降の長きにわたって、東京大学史料編纂所(以下、史料編纂所)と協力して続けてきました。やっと古文書の全体像がみえてきましたので、2018年度に、目録の第1冊目を刊行することになりました。改めて史料編纂所と連携研究の協定を結び、両所の共編という形で刊行することになりました。

薬師寺は奈良時代以来の寺院ですが、火災や戦乱の結果、古代の古文書は散逸してしまいました。しかし、中世以来の古文書が多く残っています。寺院運営のために書き留められた記録や、戦国大名の書状等からは、当時の社会を生き生きと読み取ることができます。また、古代以来の法会を、戦乱の時代にも絶えることなく、連続と実施してきました。そのような法会の記録や文書のありようからは、古代薬師寺の息吹が感じられます。そして時代とともに少しずつ変化しながら現在にいたっている様子をうかがうことができます。現在も春に花会式がおこなわれていますが、そのような法会の背後には、長い歴史が隠れているのです。

その歴史を読み解くカギとなるのが古文書です。それを広く利用できるように、日々、古文書解説に精を出しています。(文化遺産部 吉川 聡)



室町から桃山時代の薬師寺法会関係文書

🔗 退職の辞

入所からもう30年も経ったのかというのが、率直な感想です。2年10ヶ月間の平城宮跡発掘調査部(当時)時代を除くと、情報関係と国際関係にずっと従事してきました。いろいろな国で発掘調査や研修事業に参加できたことは、入所当初は想像もしていなかった貴重な体験でした。イースター島でモアイの足もと(多くのモアイには脚の表現はありません)を掘りました。そう言えば東大寺南大門の仁王像の足もとも発掘しました。カンボジアでは、タニの窯跡と西トップ遺跡の調査に参加しました。ミャンマーでは、研修事業に携わり、窯跡の発掘もお手伝いしました。また、キルギスで都城跡の調査を経験しました。しかし、何よりもアフガニスタンのパーミヤーンで、ストゥーパなどを発掘したことが思い出されます。同じ国を何度も訪れることで、一過性ではない人の付き合いが生まれ、それが長く維持されながらつながって発展していくということを経験できたことは、私個人にとっての大きな糧であると同時に研究所の資産ともなったものと思います。いろいろな世界を見せていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。(企画調整部 森本 晋)

🔗 振り返ってみて

1982年11月、奈良文化財研究所の飛鳥資料館庶務室係員に採用され、私の公務員生活が始まりました。これまでの36年半を大過なく過ごすことができ、奈文研のほか京都大学、奈良教育大学、同じ機構内のアジア太平洋無形文化遺産研究センターと12年間勤務いたしました。それぞれの職場で多くの方々から多くのことをご教示、ご指導いただきました。誠にありがとうございました。

これまで在職した中で、奈文研、とくに都城発掘調査部の勤務が一番長く、私にとってはとても居心地の良い職場でありました。また、キトラ古墳、高松塚古墳の発掘調査では、普段の事務仕事とは異なる貴重な体験を得ることができ、当時の発掘部長とは、石室解体のときは一日の発掘調査が終わるのをよく運くまで残って待っていたことが思い出されます。他機関での勤務では、医学部・附属病院で従事する中で日常生活でも役立つ知識を多く得られました。

海外出張では、韓国、カンボジアへ赴き仕事のほかに現地でも美味しい食事や体験ができ、楽しいものでした。

これまで仕事でご一緒させていただきました方々に、心より御礼申し上げます。

(研究支援推進部 松本 正典)

🔗 奈文研の一員としての9年間

平城遷都1300年の前年。2009年10月に、私は奈良文化財研究所に赴任しました。中途採用ということもあって新人挨拶の場は無く、いつの間にか奈文研にいたと思われたことでしょう。

私個人的には奈良時代が大好きでしたので、平城宮の隣で仕事ができるのが嬉しくもあり、不安でもありました。嬉しいというのは、奈文研の一員となって奈良時代の生の遺物に出会える機会があるであろうこと。実際に多数の生の遺物を見させていただきました。不安というのは、私が着任した当時の係名称が「図書・情報係」で、着任するまで「・」の意味が分かりませんでした。図書の情報に関する業務と勝手に理解していたのですが、図書とは無関係の本当のネットワーク業務だということに驚き、先行きが不安でいっぱいでした。情報に関する言葉も意味も理解できず、通勤時に吐き気をもよおしながら、前任者やネットワーク業者に恥も外聞も無く聞きまくる毎日を過ごし、ようやく奈文研のネットワーク構成を頭にたたき込みました。図書の仕事は係の人たちの方が上司でしたので、ことなきを得てきました。

奈文研では、大学図書館では味わうことのできない人と和、歴史の発掘に触れられたことに感謝です。

(研究支援推進部 渡 勝弥)



森本部長・渡橋佐・松本補佐(左から)

飛鳥資料館 春期特別展 「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」

発掘調査では、獣や魚、鳥等色々な動物の骨が出土することがあります。これらをよく観察してみると、細かい傷や変形した部分等が見つかります。

どうしてこのような痕跡が骨に残っているのでしょうか？その謎を紐解いていくと、人々と動物たちの生き生きとした姿がよみがえります。遺跡から出土する骨は、動物と人の関わり方や、かつての人々の暮らしを知る上で重要な資料なのです。

奈良文化財研究所では、環境考古学研究室が中心となって、考古学的な視点から骨の調査研究をおこなっています。今回の展覧会では、東日本大震災の復興調査支援で分析している縄文時代の巨大マグロの骨や、奈良県内でみつけた骨にスポットを当てて、古代の人々と動物との関わりを紹介します。骨に隠された古代の歴史、そして、その歴史をあきらかにする研究の舞台裏をお楽しみください。（飛鳥資料館 小沼 美結）



会 期：2019年4月23日(火)～6月30日(日)月曜休館

※4月29日(月・祝)～5月6日(月・振休)は開館、5月7日(火)は休館

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで)

イベント：「研究員を展示！」5月10日、5月17日いずれも(金)13：30～16：00

「体験！研究員のお仕事」6月9日(日)、6月21日(金)13：30～ ※要事前申込

ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/ お問い合わせ：☎0744-54-3561

平城宮跡資料館 特別企画展 「高御座」

平城宮跡資料館では、新天皇陛下即位を記念して、朝廷の重要な儀式の際に天皇が着座する玉座・高御座にスポットを当てた特別展を開催します。

奈良文化財研究所では、2010年の平城宮第一次大極殿の復原・公開に先立ち、大極殿の内部空間に関する検討をおこないました。その中で、大極殿内部の中央に置かれる高御座についても、10分の1模型での検討・製作をおこなっています。模型の設計は、1915年(大正4年)の大正天皇の即位に際して新調された高御座をベースに、文献資料から復元できる点は復元し、後世の意匠については正倉院宝物や法隆寺献納宝物を参考に修正しました。

本年10月の即位礼正殿の儀では、1909年に製作された現在の高御座が使用されます。本展を通じて、奈良時代の高御座の検討過程をご紹介しますとともに、連続と続く歴史の息づかいをお伝えできれば幸いです。（企画調整部 座朝 えみ）



10分の1高御座模型

会 期：2019年4月27日(土)～6月2日(日)月曜休館

※4月29日(月・祝)～5月6日(月・振休)は開館、5月7日(火)は休館

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで)

ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heiho/museum/ お問い合わせ：☎0742-30-6753(連携推進課)

■ お知らせ

藤原宮跡資料室 特集展示

2019年4月8日(月)～4月26日(金)

「埋もれた大宮びとの横顔—葉・まじない・庄園の木簡」

第17回 平城宮跡クリーン大会

4月6日(土) 朱雀門ひろば 9：30集合(申込不要)

※雨天の場合は4月13日(土)に実施します。

■ 記録

文化財担当者研修(専門研修)

○史跡等保存活用課程

2019年1月15日～1月25日

21名

○出土文字資料調査課程

2019年2月18日～2月22日

10名

○保存科学Ⅳ(遺構・石造文化財)課程

2019年2月25日～3月1日

6名

飛鳥資料館 冬期企画展

1月25日(金)～3月17日(日)

3,117名

「飛鳥の考古学2018」

■ 最近の本

○第21回古代官衙・集落研究会報告書

「地方官衙政庁域の変遷と特質」

(株)クパプロ 2018年12月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会
発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>
Eメール jimu@nabunken.go.jp
発行年月 2019年3月